

戦後北朝鮮のプロテスタンティズム

——歴史と展望——

金 興 洙

北朝鮮において平壤は「朝鮮人民の心臓」であり、「社会主義祖国の首都」と呼ばれている。「社会主義祖国の首都」になる前の平壤は、朝鮮半島におけるキリスト教の中心地だったが、今はその痕跡をとどめていない。北朝鮮の朝鮮キリスト教連盟を創設した康良煜(カン・ヤンウク)牧師は、1972年に韓国記者とのインタビューで、北朝鮮のキリスト教の状況について“北朝鮮の教会堂も破壊され、信仰を放棄する人も増えて、誰が信徒なのか判然としません。それぞれに孤立して存在しているかもしれません。また、地方にはいるかもしれません”と述べた。1980年代以後、事情はやや変わったが、現在230万人が居住する平壤にはプロテスタント教会が2つ、カトリック教会が1つ、ロシア正教会が1つだけ残されている。

このように歴史ある北朝鮮のキリスト教については二つの視点からみることができる。まず伝統的なひとつの観点は、北朝鮮の反宗教政策によるキリスト教の苦難と消滅過程に注目するものであり、もう一つの視点は宗教弾圧状況下でのキリスト教者の生存と信仰経験を通じて、北朝鮮キリスト教の歴史をみるものである。そしていま宗教の消滅ではなく存続に目をむけるなら、北朝鮮のキリスト教の歴史は、南北分断直後までは、社会主義体制の受容、葛藤、対決など様々な社会的なもつ

れがあり（1945-1953）、朝鮮戦争後には、少数の信者が反キリスト教的な雰囲気の中、家庭礼拝で密かに信仰を告白する沈黙の時期を送った（1953-1972）が、やがて彼らの一部は朝鮮キリスト教連盟所属というかたちで北朝鮮社会に姿を顕現し（1972-1988）、それが国際宗教機構や韓国教会との交流、そして主体思想の新しい宗教理解などに支えられて公認教会として登場した（1988-）と、これをまとめることができる。

今回の講演では、北朝鮮の政治経済的環境下でのキリスト教の存立のあり方に注目したい。南北分断後、北朝鮮のキリスト教は国家主導の再編と自発的変容の過程を通して、現在の状態になった。1946年、朝鮮キリスト教連盟（当初の名前は北朝鮮キリスト教徒連盟）の結成と1988年の教会建設を国家によるキリスト教の再編であるとする、1950年代の家庭教会と2000年代以降の地下教会は宗教迫害下でのキリスト教の大衆的変容といえる。

北朝鮮でのキリスト教の再編の中でも1988年 鳳岫（ボンス）教会と長忠（ジャンチュン）聖堂の建設は、宗教が消えた社会で完全に新しい形の、つまり平壤（ピョンヤン）スタイルの主体的キリスト教を作ろうとしたという点で、一種の宗教実験のようなものであった。この平壤スタイルのキリスト教を理解するためには、平壤における教会建設の過程を分析し、北朝鮮の思想家と宗教指導者たちが北朝鮮のキリスト教の将来をどのように構想していたのかを分析しなければならない。ここでは1980年代以降のキリスト教をいわゆる主体的キリスト教と称する。1980-90年代におこなわれた宗教に関する論議は、北朝鮮のキリスト教の未来の可能性をみせてくれた。しかしながら、北朝鮮におけるキリスト教の未来は、主体的キリスト教だけにかかっているのではなく、秘密信仰共同体にもかかっている、この講演では2000年代以降の地下教会の問題についても詳しく説明する。

1. 朝鮮戦争後のキリスト教の存続と鳳岫（ボンス）教会

北朝鮮には朝鮮戦争直前には1,473の教会と11万7千人あまりの信者がいたが、戦争直後のキリスト教の状況はこれとは大きく変わった。戦争中に多数のキリスト教徒が越南し、米軍の大規模な空襲と戦闘によって、章臺岬（ジャンデヒョン）教会、西門外（ソムンパク）教会、山亭岬（サンチョンヒョン）教会、南山岬（ナムサンヒョン）教会など朝鮮半島のキリスト教を代表していた教会を含めて平壤にあった70箇所の教会はすべて灰燼に帰した。戦争は施設を破壊し、人々の命も奪った。戦争中に犠牲になった信者や牧師、伝道者も多数にのぼる。

この前後、北朝鮮では金日成政権が、米国を“不具戴天の敵”と規定して戦争被害の責任を全面的に米国に押しつけ、反米感情を助長した。米国の宣教師たちは帝国主義的侵略と戦争遂行に加担したものとなされた。1950年代の反宗教文書には、“帝国主義的侵略の手先”である米国宣教師に“スパイ行為”をしない者はひとりもおらず、“宣教師たちが立ち上げた教育機関と医療機関”は親米思想を吹き込む“道具”であったと非難した。教会の米国に対する態度も同じであった。朝鮮キリスト教連盟下の教会指導者たちは、戦争への支援と協力を“祖国の統一、独立、民主、自由と平和”のためのものであると受け取り、1950年8月から北朝鮮のための戦勝祈禱会と武器購入献金を通じて戦争支援活動を積極的におこなった。しかし、わずか2ヵ月後に米軍と韓国軍が平壤を占領すると、平壤の3千人の信徒たちはソウルから来た宣教師と教会指導者、米軍と韓国軍を歓迎する礼拝をした。そこでは国連軍を救済者のように歓迎したのである。

しかし、戦争が停止されると再び、米国や米国の宣教師に対する敵愾心の鼓吹は非常に組織的に行われた。米国の宗教と認識されていたキ

リスト教に対する悪印象もピークになった。このような状況でキリスト教信仰を捨てる人が続出した。信者たち自身もキリスト教徒であることを公言できないようになり、宗教施設がほぼ破壊されていたので、集まろうとしても集まらない状況であった。このようなときに登場したのが家庭教会である。

最もはやく家庭教会の形を作った人はユ・サヒョン牧師だった。1952年7月、北朝鮮から逃れてきた彼はインタビューに対して“現在、すでに教会に集うかたちの信仰生活を過ごすことは出来なくなっており、長老や執事たちの中で、互いに信じられる5、6人の同志たちが集まって祈りをする程度である”と述べた。それから30年後の1981年、朝鮮キリスト教連盟の高基俊（コ・キジュン）牧師によると、戦争の際には、キリスト教徒の多くが越南して、残った信者たちは個人的な信仰生活を続けたため、初代教会のように信者たちはだれかの家で礼拝をしたと証言している。彼らは1958年から組織的な弾圧に直面して逮捕収監されたり、地元から遠い所に追放されたりしたが、一部には、秘密裏に信仰生活を維持する者もあった。

家庭教会の誕生と存続についての証言者には、越南者（ユ・サヒョン、牧師）、脱北者（シン・ピョンギル、労働党幹部）、北朝鮮訪問者（Donald Borrie、ニュージーランド監理教の牧師）、北朝鮮教会の指導者（高基俊、朝鮮キリスト教連盟牧師）などがいる。最近では脱北者の中にもそれは含まれており、反宗教意識が最も盛り上がった1960年代から1970年代までの20年ほどの間の北朝鮮における家庭教会の状況を教えてくれたのは、朝鮮労働党の幹部を務めたことがあるシン・ピョンギル（仮名）であった。彼によると、1968年に国家が制裁と弾圧をおこなった人たちのなかで、貧しい農民や基本階級出身者、仕事がかまう人（国家に有用な成功者）たちに対して過去の過ちを取り消す政策をおこなった（解決事業）。その時、家庭礼拝も許可したとされる。このような赦

免は、北朝鮮における宗教弾圧政策の強行による恐怖感のたかまりを抑えるための措置だった。60代以上の高齢者の中、信仰を保ち続けていた人たちがその対象だったが、この時、平安北道宣川、定州、平安南道南浦、黄海道新川、載寧など、キリスト教が盛んになっていた地域に200箇所の家家庭礼拝、居室が許可されたという。

1970年代の家家庭教会について再び消息を伝えたのはニュージーランドの牧師 ドナルド・ボリ (Donald Borrie) だった。1977年10月、北朝鮮訪問の際に彼が朝鮮キリスト教連盟幹部たちから聞いた話によると、北朝鮮には“数千人”のキリスト教徒がおり、彼らは主にメソジスト、長老派、カトリック信者たちで家家庭教会の形で個人的に信仰を実践しているという。そしてそれらの人々の存在が再び知られたのは1981年であった。朝鮮キリスト教連盟の 高基俊 (コ・キジュン) 牧師はウィーンで開かれた会合で、北朝鮮には約5千人のキリスト教徒がおり、平壤市の60箇所をはじめ、全国的に500箇所の礼拝居室があることを明らかにした。ある脱北者の証言によれば、北朝鮮では1980年10月第6次党大会の前、大赦免と称する政策として、キリスト教の抑圧政策によって地方に追放されたキリスト教徒たちが赦免されて帰って来た。そして、彼らが北朝鮮の信徒の中心勢力になったという。

家家庭教会の礼拝が、韓国や外国人訪問客に公開され始めたのは1980年代初めからだった。これを通じて家家庭教会は10人内外の信者たちで構成されており、礼拝では1930年代以降、長老派教会が使用した新編の賛美歌が使用されているということ、各地域の家家庭教会は朝鮮キリスト教連盟の中央委員会の下部組織である地域委員会を通じて指導を受けていることが分かった。上記の証言からは、1950年代から秘密裏に家家庭教会の形で信仰生活を送っていた人たちがいたが、1960年代後半からは政府が許容する違う形の家家庭教会が存在したことがわかる。

1950年代以降の家家庭教会の存立と1970年代まで続いたキリスト教

徒弾圧により、北朝鮮では家庭教会など個人単位で信仰を守っている人々がいたということがわかる。このような形は1970～80年代を経て1990年代にも続いていた。例えば、1992年に北朝鮮を訪問した米国在住韓国人を通じて伝えられたある北朝鮮の女性の手紙には、“いかなる逆境の中でも私たちを守ってください。見守ってくださった神様に感謝の祈りを捧げ、永遠に神様の娘として残った余生を送ります”と書かれていた。このような信徒たちや家庭教会の信徒の中で平壤に居住していた人たちの一部が集まって、1988年に新たに建立された鳳岫（ボンス）教会に合流したと北朝鮮教会の指導者たちは言う。鳳岫（ボンス）教会には、過去の牧師、あるいは長老などの教会の役員たちの子供たち20人以上が出席しているとみなされている。

家庭教会の発見は、北朝鮮のキリスト教歴史に対する関心を国家の宗教政策のテーマよりキリスト教信者の生存問題に関心を向けることによって可能になった。このようにみると北朝鮮の教会の歴史は、宗教迫害による再編にともなう変容の歴史である。そして北朝鮮のキリスト教の歴史的存立形態を整理するというなら、それは朝鮮戦争後、少数のキリスト教徒の家庭教会からはじまって公認教会である 鳳岫（ボンス）教会と 長忠（ジャンチュン）聖堂にいたることができる。

1980年代初からの聖書や賛美歌の刊行、朝鮮語辞書での新しい宗教記述、南北及び世界教会との活発な宗教交流を考えると、1988年の 鳳岫（ボンス）教会建立の宗教的動機は疑う余地がない。1970年代に入って北朝鮮では韓国宗教人との統一戦線が強調され、北朝鮮の宗教団体は統一問題や韓国の宗教弾圧、人権問題などに介入したり、韓国の宗教団体との接触の意思を示したりもした。これがきっかけになり、北朝鮮の朝鮮キリスト教連盟と話すことが出来たのは、海外に居住する韓国出身のキリスト教団体である祖国統一キリスト教会だった。北朝鮮と海外同胞、祖国統一のためのキリスト教者同士の最初の対話が、オーストリ

アのウィーンで1981年11月3日から5日まで開かれたのである。会議では、北朝鮮の統一案のほかにも、祖国統一と外勢（ヨム・グクヨル）、社会主義とキリスト教（コ・キジュン）、統一のためのキリスト者の課題（イ・ヨンビン）、祖国分裂の歴史に対するキリスト者の責任（カン・ウィチョ）などが論議された。また、このとき、祖国平和統一委員会副委員長の全今哲（チョン・グムチョル）は、高麗民主連邦共和国創立案の合理性と現実性を論じ、すべての愛国同胞たちが民族団結して、会議案を実現するために努力しなければならないと主張した。

韓国キリスト教教会協議会は、祖国統一キリスト教会議の統一对話を妨害したが、労働新聞は“民族の和解と団結，祖国統一に向けた初の歴史的な会合であった”と高く評価した。統一对話の参加者たちは、この会議が“民族間の和解のため，敵対関係を醸成する韓国の反共的・親米的キリスト教”に統一对話の刺激を与えてくれたと自己評価した。第2回目の協議は1982年のヘルシンキで開かれたが，海外同胞運動の方向を反独裁民主化から反米自主化問題に転換させる問題を討議した。欧州でこの会話を準備したイ・ヨンビンは，1955年ドイツに留学，当時のチェコのヨゼフ・ロマドゥカ（Josef Luke Hromadka）とともにキリスト教とマルクス主義の対話の先頭に立った同大学のハンス・イバントウ（Hans Joachim Iwand）の下で勉強した人物だった。その後1986年，スイスのグルリオンで朝鮮キリスト教連盟と韓国キリスト教教会協議会（NCC in Korea）の間で統一对話が開かれた。コ・キジュン牧師，キム・ウンボン牧師を含めた5人の朝鮮キリスト教連盟代表団は，9月2日からローザンヌ近郊グルリオンで開かれた会議で，韓国教会の代表たちと歴史的な出合いを果たしたのである。世界教会協議会（WCC）が主催した“平和に対するキリスト教的関心の聖書的神学的根拠”に関する会議の場のことであった。南北教会の代表らが平和統一をテーマに発表して聖書の勉強もした。これは海外在住韓国人キリス

ト教者と朝鮮キリスト教連盟の代表者達が出席した1981年の統一対話とは異なり、40年ぶりに初めて行われた南北教会の代表達の重要な会議であったのである。なお、このグルリオン会議は1988年にも開かれた。

1988年の鳳岫（ボンス）教会の建設は、祖国統一のための北朝鮮と海外同胞、キリスト者間の対話および南北間のキリスト教者の宗教交流の結実であるといえる。1980年代初以降、海外在住韓国人キリスト教者たちが、北朝鮮の政治家や宗教指導者に会って教会建設を要請した。韓国教会及び国際宗教機関と接触していたキリスト教連盟は、教会の建設のことで圧力を受けていたとみられる。金日成の伝記“世紀とともに”には“結局、国家が彼ら〔宗教人〕に無償で教会堂を建てて生活も保障してくれている”と書かれている。鳳岫（ボンス）教会の設立は、政府が建立した教会で信仰心を宗教儀式による表現ができるようになったという点で、6.25戦争後の北朝鮮の教会史で画期的なことであり、北朝鮮キリスト教の伝承であるということで歴史的意義を有している。

これとは別に鳳岫（ボンス）教会の建設についての外因論的な主張もある。外因論とは、数十年間宗教を弾圧してきた北朝鮮社会に教会が突如として登場したことについて、宗教の外に原因を求める主張である。この主張は、教会が宗教的動機で建立されたというよりは、対外関係を考慮した北朝鮮政府の政策的産物とみなすものである。この主張によると、北朝鮮当局にとっては南北共同開催の可能性が議論されたソウル五輪（1988年9月）、そして世界青年学生祭典（1989年6月）に先立って、伝統的な形の礼拝施設を設置する必要があったというのである。韓国に亡命したカン・ミョンドによれば、平壤世界青年学生フェスティバルに合わせて北朝鮮に宗教の自由があるというイメージを作ろうとして教会が建てられており、そこで行われている宗教行事に参加している人も強いられて参加した人達だったという。朝鮮労働党国際担当書記だった黄長燁（ファン・ジャンヨプ）は1997年韓国に亡命したが、“韓国人たち

を欺くために偽の教会を何ヶ所か作った”と言ったことがある。だとすればこの場合、鳳岫（ボンス）教会は偽装施設であり、その教会建立の教会史的意義は認められない。

2. 主体思想と主体的キリスト教

家庭教会と鳳岫（ボンス）教会の歴史的な関連、鳳岫教会の宗教的アイデンティティ、そして主体的キリスト教の可能性は、主体思想とキリスト教の共存の可能性に関する議論を誘引する。1950～60年代の対外関係における反事大主義的主体思想、その後70年代の黄長燁（ファン・ジャンヨプ）の人間中心論的主体思想が体系化されたものこそが、金正日（キム・ジョンイル）の名前で発表された論文“主体思想について”（1982）であった。世界における人間の地位と役割について解説する主体思想は、社会を物質的条件として考えるのではなく、人間を中心としてみなし（哲学的原理）、社会の発展過程を人民大衆の自主的で創造的な活動としてみなしなければならないとすること（社会・歴史的原理）が核心内容であった。主体思想の社会・歴史的原理によると、人民大衆は社会的運動を押し進めていく当事者であり、人民大衆によってすべてが創造され、彼らの闘争によって歴史が発展する。金正日はその著作“主体思想について”において、人民大衆の地位と役割について原則的な同意を示して、人民大衆が歴史の主体としての地位を占めて役割を果たすならば、必ずや指導者と大衆が結合するはずだという点を強調した。指導者と大衆の結合は、人民大衆に対する党と首領の領導問題に直結し、首領の唯一・絶対的な支配体制の構築につながる。つまり唯一の思想体系は、首領による唯一の領導體系につながっているわけである。

では、そのような首領中心主義の下で、キリスト教は果たして存続

可能であろうか？それは言い換えれば、キリスト教が主体思想と共存できるかという問いでもあるが、金日成（キム・イルソン）主席は“人々が平和で幸せに生きることを願う”キリスト教精神と自らの主体思想は“矛盾しない”と述べており、宗教が“互いに愛しあいながら平和に生きなさい”と教えることは良いことであると話したことがある。すなわち、主体思想と宗教的教理には共通点があるということだが、これは1980年代から、北朝鮮が国際的な宗教機構や海外同胞のキリスト教徒達と交流した結果、1990年代に入って宗教に対する辞書の定義が客観的な方向で大きく変化した時、その思想的基盤になった態度だった。

北朝鮮における主体思想の専門家たちの宗教に対する関心は、すでに1970年代後半から現れていた。1977年10月初めに平壤で開かれた国際主体思想セミナーに参加したニュージーランドのドナルド・ボリ（Donald Borrie）牧師に、当時の金日成（キム・イルソン）大学総長の黄長燁（ファン・ジャンヨプ）は“主体思想の人間理解に比較される仏教やキリスト教の人間理解に対する神学的・哲学的な話”に言及し、そのようなテーマについて多くの関心があると話した。主体思想の最高理論家であった黄長燁は、1989年には平壤を訪問した日本教会協議会（NCC in Japan）代表団に、北朝鮮は主体思想に基づいて宗教についても従来のマルクス主義とは異なる観点を持っていると述べた。黄長燁の話によると、1980年代後半から北朝鮮では宗教研究の観点が従来の科学的世界観から主体思想に転換され、その結果宗教の本質よりは宗教の機能により多くの関心が持たれることになったという。黄長燁はまた、北朝鮮社会で宗教が発展するためには、宗教の世界観が神中心的なものから人間中心的なそれに変化しなければならないと発言した。これは人間中心的世界観への移行という伝統的キリスト教の主体的再編あるいは主体的宗教の創出を意味するものであった。

北朝鮮の宗教研究者の中で黄長燁の観点を最もよく代弁した人は社

会科学院の主体思想研究所長パク・スンドクであった。彼は1987年11月 WCC代表団が平壤を訪問した際にも、マルクス主義と主体思想の異なる点と主体思想の宗教理解や、植民地時代に金日成主席と宗教者達が協力したことなどについて語った。主体思想はキリスト教が科学的世界観であるかどうかだけに関心を持つのではなく、人間救済、人間解放の共通した方策を模索するレベルから、キリスト教との関係に関心を持つという点を強調するものである。パク・スンドクは、米国で開催された韓国人人たちの北米州キリスト者会議で、キリスト教と主体思想の対話を“新しい思想史”の展開であると言い、大きな意味を付与した。パク・スンドクは1990年8月北京で開かれた北米州キリスト者会議第24回年次大会で、主体思想はキリスト教との対話を重視しており、過去の一時期マルクス・レーニン主義においてはブルジョアに服従したキリスト教を分析して、その社会的な役割を批判して、主体思想は第2次世界大戦以降の現代キリスト教に注目し、それが民衆の側に立って資本主義社会で行われる人間の疎外を克服するための闘争に力を尽くしている点に注目していると述べた。

黄長燁（ファン・ジャンヨプ）やパク・スンドクの発言は思想家としての立場だが、1980年代にすでに北朝鮮教会も、やはり人間中心的主体思想の哲学的原理にすでに影響を受けていたとみられる。1988年コ・キジュン牧師は、平壤を訪問したカナダ教会協議会の代表達に対して、北朝鮮のキリスト教徒たちは全能の創造主様を信じているが、すべてのことを神に委ねたりはしないと云って、“私たち人間は、神様から受け取った恩師と知恵と能力を全部使って、我々がやるべきことを果たすため努力しなければならない”と話した。このコ・キジュン牧師の発言をファン・ジャンヨプの表現に敷衍するならば、神中心の世界観から、世界をすでに占めている人間の役割を高めるため、人間中心の世界観への観点の転換を意味する。コ・キジュンは1981年ウィーンで開かれた

祖国統一キリスト教会との統一对話でも、北朝鮮でキリスト教者達が共産主義者と社会主義社会の建設と祖国統一に向けて共に歩いていくための共通理念的根拠を、人間中心の主体思想と人間愛のキリスト教に見いだしている。これは北朝鮮の宗教者が、人間中心の主体思想の概念として宗教を理解しようとしたとみられる初のケースであった。この対話でコ・キジュンは、“キリスト教者である私は、主体思想という中心の哲学思想として、すべてのことを人間中心に考え、人間のために奉仕することを要請します”，そして“それこそは人間愛の理念でしょう”と話した。

人間を中心に考え、人間のために奉仕することを求める“人間愛の理念”と言った。主体思想というのは、人間が全ての主人であり、全てのことを決定する思想である。また、人間が全てのことを決定するということは、世界を改造することや、自らの運命の改造に決定的な役割を果たすことを意味し、決して世界の全ての発展が人間によって成り立つということではない。主体思想とキリスト教の関係の中で最も大きな問題は首領中心主義にある。前掲の通り、金正日は、人民大衆が歴史の主体として責任を持って役割をするためには“指導者と大衆の結合”が必要であると強調した。指導者と大衆の結合は、人民大衆による党と首領の領導問題に直結し、首領中心主義の領域で執権者の要求を絶対化する理論なので、北朝鮮キリスト教の未来は首領中心主義受容、排斥によって大きく差がでてくるのかもしれない。

北朝鮮で首領の唯一絶対支配体制が続くと、その支配の負担ゆえにキリスト教の活動は、現在のボンス教会のような地位を維持することが難しいかもしれない。ボンス教会が以前にくらべて自律性を確保することができないと、日帝強占期に神社参拝を強要された韓国キリスト教のように、結局北朝鮮のキリスト教はアイデンティティを失う。このような問題点を指摘した人は女性神学者朴淳敬（パク・スングヨン）教授

であった。第2次キリスト者東京会議（1991年）の主題講演を担当したパク・スンギョンは、神様を正しく代理する教皇が偶像ではないように、民族の自主的生存権を守った人物であり、人民を搾取しない首領は独裁者でも偶像でもないが、首領（の個体）は歴史の上では消滅する存在なので神様の席を占めることはできないと主張した。

このようにパク・スンギョンは金日成の歴史的な業績を認めながらも主体思想の下位体制として北朝鮮のキリスト教の危険性を指摘した。それは主体思想の政治宗教的な傾向に対する警告であった。金日成は民族の自主的な生存権を守ってくれた人物であり、人民を搾取しない首領であるというその講演の内容によって、パク・スンギョンは日本から帰国後に国家保安法違反で逮捕された。この会議にはコ・キジュン牧師、キム・ウンボン牧師など朝鮮キリスト教連盟中央委員会幹部達が参加していたが、パク・スンギョンの講演についての北朝鮮の参加者達の意見は知られていない。

3. 経済危機の中での朝鮮キリスト教連盟と地下教会

1980年代の様々な教会変化が政治や思想の領域ではじまったというなら、1990年代のそれは経済の領域ではじまった。1980年代後半以降、北朝鮮の社会は経済的に困難な状況にあった。このような試練は社会主義が経験した全般的な病理現象の中の一部であったが、1990年代の度重なる洪水や早魃は、北朝鮮の社会をさらに悪化させた。このような状況で、1990年代後半以降、南韓教会の統一宣教運動は対北支援のかたちをとった。この時期に活動した南北の分かち合い運動や韓民族福祉財団、グッドネイバース、ワールドビジョン、ユジンベル財団などのキリスト教系統NGOが開発や救護事業を主導した。

1990年代の北朝鮮では深刻な経済状況が続き、朝鮮キリスト教連盟は韓国や国際宗教機構とともに人道的な支援を基盤にして、1990年代後半以降北朝鮮社会の災害と経済的な混乱を乗り越えるための様々な社会運動が展開し、その経験をもとに社会奉仕を中心とする信仰共同体の機能が強化された。朝鮮キリスト教連盟の康永燮（カン・ヨンソプ）牧師は、すでに1997年3月、ニューヨークで開かれた南北米教会協議会において、我が連盟と全国約500個の家庭教会、また神学院の物質的な基礎をより固め、その将来を確固たるものにして、社会奉仕宣教活動を活発化させていくと述べた。このカン・ヨンソプの発言は、社会奉仕活動が南北統一運動と共に主体的なキリスト教の重要な活動であること、および今後の北朝鮮のキリスト教がどのような道を進むのかを指し示している。このような形の社会奉仕活動は、東欧社会主義国家の教会ですでに実施されており、人道的な支援のために北朝鮮を訪問する人達を、「ここに捨てられた人生を救援する使命を受けて私達のもとを訪れた神様の使徒」と信じている状況では、社会奉仕の共同体というキリスト教の構想こそは、北朝鮮住民達の認定と同意を得ることができるキリスト教のすがたであったのかもしれない。

北朝鮮の経済危機はこのようにキリスト教連盟と公認教会の活動方向に影響を与えているが、地下宗教の登場にも影響を与えた。韓国社会で北朝鮮に地下教会があるとの主張が出されたのは1980年代の半ばごろである。1990年代中盤からは報道機関といくつかのキリスト教の宣教団体が地下教会の存在を公然と主張するようになった。北朝鮮内部の地下教会の存在は、地下教会のために働いている人達の主張で伝わったが、その事実を確認することは難しかった。地下教会のために密かに働いている対北宣教団体達は、地下教会信者達が送った手紙などの資料までもを公開しながらその存在を主張した。地下教会の存在は現在においても確認することは難しいが、2000年代に入って中国の辺境地域を中

心に地下教会がつくられ始めたのは事実であるとみられる。

北朝鮮では経済的に深刻な状況の中で、多くの人々が脱北したり、中国との往来もするようになり、中国の辺境地域でそれらの人達を助けて北朝鮮に帰している韓国とアメリカの宣教団体ができた。現在の北朝鮮の大概の地下教会は、中国へ来た者達がキリスト教に接した後、帰国して組織した秘密信仰共同体のように思われる。その数を正確には知ることとはできないが、既存の信仰告白者達以外にもこのような形の地下教会ができていることは事実だとみられる。地下教会は秘密団体という点でキリスト教連盟の指導を受けている家庭教会とは異なる。また、だいたい韓国の宣教者達の影響で形成された信仰共同体という点で、北朝鮮当局が警戒するところでもある。地下教会の設立に関与している宣教団体達は地下教会の信者数を約15～30万人と推測しており、祝福信仰的で、聖書の学習より宗教の体験を中心にしている信仰形態になっていると話している。2015年6月25日 釜山（プサン）水營路（スウヨンロ）教会で開いた統一宣教カンファレンスにおいて、ロシアに拠点を置いて北朝鮮で宣教をしている宣教者は、北朝鮮の地下教会の信者達の具体的な信仰生活を説明しながら、食事をする前にこっそりと感謝の祈禱をしたり、信者同士で集ったりしていると語った。

地下教会の行く末は信教の自由にかかっている。信教の自由に関するかぎり、北朝鮮当局と北朝鮮の宗教者達の立場は終始一貫して一体である。信仰の自由は憲法に明記されており、保障されているが、現実的には異なる。アメリカ政府傘下の国際宗教自由委員会（U.S. Commission on International Religious Freedom）が1999年から発刊した『国際的宗教の自由についての年次報告書』では、北朝鮮を世界で宗教の自由を最も弾圧している国と指弾している。北朝鮮と宗教団体達はこの報告書に強く反発しながら、信仰の自由が法律的に完全に保障されていることを繰り返し主張した。韓国の宗教団体はもちろんアメリカの宗教者達

までが北朝鮮を訪問し、北朝鮮の団体達に会うことが、信仰の自由を証し立てる証拠であると主張している。実際、1990年代以降、多くの宗教者達が北朝鮮を訪問して、宗教施設と宗教団体を通じて宗教者に会った。訪問者達の中には、教皇庁の高位聖職者達、ビリー・グラハム（Billy Graham）牧師、韓国NCC総務 クォン・ホギョン牧師、WCC総務コンラド・ライザー（Konrad Raiser）牧師、その外にも韓国をはじめアメリカ、カナダ、日本、ドイツなど他の国々の教会指導者達が含まれている。それにもかかわらず、外部の人からみると平壤（ピョンヤン）の教会で行っている宗教行為には曖昧なところがあった。この曖昧さは北朝鮮当局の宗教利用と統制から生まれたものである。宗教統制により、北朝鮮社会における宗教活動は一部当局から許容された者だけが可能で、そのような環境ゆえに地下教会が作られているのである。脱北者達はだいたい最近まで北朝鮮の体制の周囲で生活してきた人々で、この人達に伝道した韓国の宣教者の中には北朝鮮の体制崩壊を祈祷している人がある。その人達は北朝鮮の体制について敵愾心を持っている宣教者で、自らの冷静な価値観を脱北者を通じて北朝鮮社会に伝えようとしている人もいる。北朝鮮政府の立場からすると、韓中の国境地域で働いている南韓の宣教者達の影響で改宗した脱北者達の帰還は、体制に脅威を与える要素となるものかもしれない。体制弛緩の現象におかれている北朝鮮当局が地下教会をどのようにみるのかは決まっている。

このような状況下、韓国教会の一部からは北朝鮮の地下教会を育成すべきであり、北朝鮮キリスト教の正統性も偽装団体のボンス教会にあるのではなく地下教会にこそあるという主張が提起された。アメリカの日刊紙 ワシントン・ポスト（The Washington Post）は2001年4月10日、韓国教会の北朝鮮宣教活動によって北朝鮮内の地下組織と信者数が増えていると報道した。この記事を引用して韓国のKBSも報道した。この報道について朝鮮キリスト教連盟のオ・ギョンウ書記長は、即座に韓国

キリスト教教会協議会の総務に書信を送り、これが事実であれば朝鮮キリスト教連盟の位相を棄損する卑劣な行為であると非難した。これは地下教会の問題に関わる朝鮮キリスト教連盟のはじめての反応だった。

現在も韓国教会の一部は、北朝鮮宣教という名目で地下信仰共同体の形成を目指して活動している。地下教会の進むべき道に関連しては、地下教会自らが進路を開拓できるように援助しようという主張が、最近韓国教会内部から提起されてもいる。北朝鮮人が北朝鮮の地下教会を建てるのが最も適切であり、その人達こそが北朝鮮の福音化に最適任者である。その人達は文化と言語に慣れているだけではなく、人間関係もあらかじめ形成されている。2000年代に入ってから組織が存在すると判断される地下教会がますますことなく発展し、ある程度の勢力にまでなった場合、国家に従属する公認教会に対して国家従属とは背教であることを警告する役割を果たすようになるのかもしれない。

4. 結論

本稿は北朝鮮の歴史的な変化を北朝鮮のキリスト教者達の生き残りの様相を中心に理解しようとしてきた。1980年代、姿を表したボンス教会は、1950年代以後北朝鮮の内部における変容を経験し、存続してきた教会と歴史的な関連性を持っていることが発見された。また、本稿は宗教活動が制限されている北朝鮮で、何人かの哲学者と朝鮮キリスト教連盟の幹部達が、平壤スタイルのキリスト教について発言した内容について探ってみた。それらの人々は、1980年以後から人間中心の主体思想を通じてキリスト教を理解していた。いま、これを主体的なキリスト教とするなら、主体的なキリスト教とは何よりも信仰論と人間論の領域で主体思想の影響のもとにあるものと予想される。北朝鮮の未来は現

在よりは多少は望ましいものであるかもしれないし、絶望的なことになるかもしれないが、主体思想の支配が行き渡ればそれだけ北朝鮮の独自性がうまれる。しかし、いうまでもなく、そのときキリスト教のアイデンティティーは失われる。現在の朝鮮キリスト教連盟の力量や自立性と北朝鮮における主体思想の位置付けを勘案すると、首領中心主義の排斥はできないかもしれないが、いかなる場合であれ北朝鮮キリスト教の未来は主体思想、特に首領中心主義との関係にかかっていると思われる。それは主体思想が北朝鮮宣教の架橋になるかもしれないが、障害物になる可能性もあることを意味する。

残念ながら現在の北朝鮮キリスト教は、平壤を中心に神社参拝に反対して日帝国家権力と戦った伝統を失い、北朝鮮当局の統制と干渉に束縛されている。朝鮮キリスト教連盟の目的は信者の信仰の自由を守ることにあるはずが、国家権力の宗教干渉と闘って信仰的良心の番人の役割をしているようにも見えない。それゆえ、北朝鮮キリスト教は外部世界からキリスト教会としてのアイデンティティーを疑われているが、ボンス教会は主日礼拝を通じて宣教センターの役割だけは果たしている。2000年代に入ってからたくさん組織化されていることがうかがえる地下教会の場合は、まだ北朝鮮崩壊を祈祷する韓国宣教者達の影響下にある点から、その未来は不安定である。

1988年北朝鮮に教会と聖堂ができたというニュースに、感激した北朝鮮の人々がいるし、“いかなる逆境の中でも私達を守ってください。見守ってくださった神様に感謝の祈りを捧げ、永遠に神様の娘として残った余生をおくります。”と告白したクリスチャンたちもいる。主体的キリスト教へと発展するのか、地下教会に残るのか、主体思想のもとで北朝鮮キリスト教の未来はこの切株の信仰者にかかっている。

(この講演文の原文はハングルであるが、和文に翻訳して掲載する。)